

その他普及記事 (Other articles)

書評：『栃木のきのこ新図鑑』（下野新聞社）

Book review

佐々木 廣海

Hiromi Sasaki

神奈川県藤沢市

Fujisawa-shi, Kanagawa Prefecture, Japan

E-mail: sasaki_kx70@yahoo.co.jp

Article Info: Submitted: 20 June 2025

Published: 30 June 2025

佐野書店からお勧めされたので購入してみた。表紙には 780 種と大きく書いてある。ハンディタイプの他の図鑑と比べると、『新装版山溪フィールドブックス 7 きのこ』（1155 種）に次いで種数が多い。他の図鑑には載っていない珍しいきのこも載っていることが期待される。

頭から見ていこう。

この図鑑は、まず初めに前書『栃木のおいしいきのこ』（栃木県きのこ同好会 編・著、1995 年刊行）」との違いから始まる。「前書は食用と有毒種が多いが本書は食毒不明種が 7 割以上を占める」ことと、そして、そのような種を図鑑に載せる意義を懇々と説いている。きのこを見ると食毒についてしか頭に思い浮かばないような人を説得して、食べられるかどうかかわからないきのこを多数載せるところまで漕ぎつけた著者の苦勞が偲ばれる（ご苦勞さまでした）。

驚きなのは、目次には書かれていないけれども、目次の次にくるのが、「栃木のきのこのあらまし」と並んで、なんと「チタケと栃木県」。これに 5 ページも割いている。栃木でのチチタケ人気の話は知っていたが、ハンディタイプでページ数も限られているのにも関わらず、ここまで詳しく書かねばならないのか？ そのチチタケの人氣は、埼玉県や神奈川県で育った私にはわからないが、栃木の人には欠かせない（この図鑑の売れ行きにも左右するほどの）基本的な情報なのであろう。

ここまで来てやっと各種きのこの解説になる。ページをめくると、やはり栃木ならではの、まず最初にチチタケとチチタケの近縁種がずらり、豪華見開き 2 ページである。チチタケはベニタケ科の種なので、多くの図鑑ではハラタケ形きのこ（柄と傘のあるきのこ）の中でも、一番後ろに位置するのが普通である。ここで度肝を抜かれ、次は何が起こるのだろう？とページをめくってみたが、ヒラタケがあり、ここからは普通な感じの図鑑となった。しかし、さらにページをめくっていくと、???、テングタケ科がタマゴタケしかない。随分と種数が少ない！と思っていたら、コラム

（というか章）の扉が出てきて「きのこの料理」とあった。何？と思つて、前に戻って扉のタイトルを見ると「おいしいきのこ」となっていた。道理で少ないわけだ！そして、この「きのこの料理」の章についても、普通では料理法の紹介は図鑑の一番最後にくるものなのに、「そう来たか！」という意表をついた構成だ。

次いで、「知っておきたい毒きのこ」の章になった。ここまでくると、きのこの図鑑ではなくて、実はきのこ狩りの本なのか？、との疑いが出てきた。そして、きのこ中毒のコラムとなる。もうこの辺に来ると、本格的な図鑑というのは諦めかかってしまった。

次の章が「ハラタケ類（担子菌類）」。やっと見慣れた図鑑が始まって少しほっとしたが、個人的には普通のきのこに興味がありませんので、どんどんページをめくってスルーしていく。「ヒダナシタケ類（担子菌類）」の章まできて、ヒメヌメリイグチやベニセンコウタケなどは、写真が載っている図鑑が少なく調べて調べるのに苦勞したことを思い出した。



書影

「腹菌類（担子菌類）」の章では、ツチグリの学名が他の図鑑と違い *Astraeus hygrometricus* ではなく *Astraeus ryoocheoninii* となっている。この学名は 2017 年に韓国の研究者が韓国産のツチグリに対してつけたもので、信州大学がツチグリの多様性を研究した際に登録した、日本産ツチグリの DNA のデータも含めて分子系統解析を行った結果から、日本産のものも同種とされていた。さすが精力的に新種記載をしている著者だけに、この図鑑では最新の研究成果を踏まえた学名が採用されている。あれ？、腹菌類の章はじっくり見ていこうと思っていたが、10 ページだけですぐに終わってしまった？

「キクラゲ類・その他の担子菌類」の章に入り、日頃から気になっていたハナビラニカワタケの学名を見てみた。ハナビラニカワタケは iNaturalist 上で海外の人に学名をよく修正される。ピンク色のものは日本産の標本をタイプとして記載された *Phaeotremella roseotincta* (Lloyd) Malysheva 2018 だとのこと。この図鑑では他の図鑑と同様に *P. foliacea* となっていた。日本産の標本を使ってもっと調べる必要があるということか。そして、この章の最後には、きのこらしくない変わったものが 3 種あった。これは自分でも見つけようと記憶に焼き付けておくことにする。

「子囊菌類」の章に入った。コウボウフデは担子菌類と思われていたが、後から子囊菌類であったことが分かったという経緯のある種なので、さすがに 2 種分のスペースを割いて詳しく解説されていた。多くの図鑑では、子囊菌は申し訳程度に少ししか載っていないが、この図鑑では多数取り上げられている。地下生菌の *Pachyphlodes* に近縁なアレハダチャワンタケもちゃんと載っているところもよい。

子囊菌類でこの図鑑も終わりかと思っていたところ、「地下生菌」の章の扉が出てきた。特設の章であるにもかかわらず、図鑑の最後の方というのは、チチタケとの扱いの差を感じてしまう。またスペースの都合なのであろう、1 種分のスペースに 2 種を入れ込んでいるところが多いのは少し残念なところ。ただし、ここまでのページには少なかった胞子の写真も多数載せて、実用性を高めている。地下生菌の場合は子実体の写真が小さくなくても、胞子の写真は絶対に必要と思っているが、きのこ狩りの人も対象に含めた一般向けきのこ図鑑としては画期的であろう。個別の種で見ていくと、個人的に目に留まったのは、アスパラガス畑に発生する *Mattirolomyces terfezioides* だ。このきのこは強い甘味があるらしいので、いつかは味わってみたいと思う。もちろん、著者の山本さんが新種記載したケカビ門の *Vinositunica ingens* も載っていた。この種は黒い粒々が入った子実体で、まるでキイチゴの種子が混じった鳥の糞みたい(表現が美しくなくてすみません)で、とても印象的だ。

地下生菌の次は「冬虫夏草類」の章となった。こちらはかなり詰め込んで、多くの種を取り上げている。個々の写真が小さく、説明も短くなっているが、一度に多くのきのこが目に入ってくる

ので、冬虫夏草の多様性が実感できた。

最後に「きのこの話あれこれ」の章になる。ここでは 6 つの興味深い話が書かれていた。どこにもコラムとは明示されていないが、著者を紹介するページのコラム著者欄には全員の名前があるので、全てコラムのようだ。それはどうでもよいこととして、これらのコラムの著者のほとんどは栃木に何らかのゆかりのある人で、話の興味深さとともに、栃木の人材の豊富さを見せつけられたようだった。

全体をまとめると、このコンパクトさで、この情報量とはにかくすごい。これだけの種数のきれいな写真を撮りためた著者の労力だけでなく、県内に写真を撮ってくれている人がいたという栃木の豊富な人材にも感心させられた。情報量が多い一方で、正確性も追求され、最新の学名が採用されている点でも、この図鑑の内容は信頼性が高い。そして、きのこ狩り向けの図鑑なのか？、それとも（マニアックな）一般向けの本格的なきのこ図鑑なのか？、様々な要素が入り混じって混沌としているところに、制約が多い中でも工夫を重ね、使える図鑑にしようとした著者のこだわりや苦労が伝わってきた。総合的に考えると、調査に図鑑を 1 冊だけ持っていくとしたら、この図鑑一択であろう。

栃木のきのこ新図鑑：食べておいしいきのこから食用厳禁の毒きのこまで 780 種

山本航平・大前宗之（著）、栃木県きのこ同好会（協力）

A5 変型判／並製／320 頁

出版社：下野新聞社

発売日：2024 年 7 月 23 日

ISBN: 978-4-88286-873-6